

大垣外遺跡

箕輪町立箕輪東小学校渡り廊下改築工事に伴う
大垣外遺跡の第3次緊急発掘調査報告書

1994年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

大垣外遺跡

箕輪町立箕輪東小学校渡り廊下改築工事に伴う

大垣外遺跡の第3次緊急発掘調査報告書

1994年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

序

大垣外遺跡は、南小河内区のほぼ中央部、沢川の北側に広がる扇状地上にあります。ここは、以前から多くの遺物を採集できるところとして知られており、町の重要な遺跡の1つであります。遺跡包蔵地のおよそは、笑輪東小学校の敷地となっており、平成元年度に体育館の全面改築に先立つ第1次調査が、4年度にはプールの移転新築に先立つ第2次調査を実施しました。本年、創立120周年を迎える昭和45年からは校舎の建て替えが始まり、今回渡り廊下の全面改築を行うことになりました。調査は、5月中旬から6月初めまでの約10日間行われ、縄文時代等の遺構や遺物が出土しました。

調査結果につきましては、本書の中で詳細に記しておりますので、今後多くの方々に広く活用されて、郷土の歴史解明の一助になれば幸いと存じます。

末筆になりましたが、今回の調査に際し深いご協力とご理解をいただきました学校関係者、並びに調査に直接従事してくださりました団員の皆様に心より感謝申し上げます。

1994年3月

長野県上伊那郡笑輪町教育委員会
教育長 堀口 泉

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町東箕輪3187-1番地他に所在する大垣外遺跡の第3次緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行ったものである。平成5年5月11日から平成5年6月2日まで調査を実施し、平成6年3月まで整理作業及び報告書の執筆作業を行った。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。

遺物の復元－福沢幸一

遺構図の整理・トレース－宮脇陽子

遺物の実測・トレース－根橋とし子、根橋由紀、西出あゆみ、宮脇陽子、百瀬千里

土器拓影・トレース－井上武雄、宮脇陽子

挿図作成－赤松 茂、根橋とし子、宮脇陽子

写真撮影・図版作成－赤松 茂

4. 遺構図は、次の縮尺に統一した。

住居址－1：40、土杭－1：60、1：40

5. 遺物実測図は、次の縮尺に統一した。

土器実測図－1：4、土器拓影図－1：3、石器実測図－1：3

6. 土器実測図及び土器拓影図の断面は、粘土帶の接合状況の観察できるもののみ断面に表示した。また縄文土器拓影図断面のスクリーントーンは、繊維混入を表す。

7. 本書の執筆は、赤松 茂、宮脇陽子が行った。

8. 本書の編集は、赤松 茂、根橋とし子、根橋由紀、西出あゆみ、樋口彦雄、福沢幸一、宮脇陽子、百瀬千里が行った。

9. 出土遺物及び図版類は、全て箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

本文目次

題　字	団　長　樋口彦雄
序	教育長　堀口　泉
例　言	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
第Ⅰ章 発掘調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査組織の編成.....	2
第3節 調査日誌.....	3
第Ⅱ章 遺跡の立地.....	4
第1節 自然環境.....	4
第2節 歴史環境.....	5
第Ⅲ章 調査の結果.....	8
第1節 調査方法と結果概要.....	8
第2節 土層堆積状況.....	8
第Ⅳ章 遺構と遺物.....	10
第1節 住居址.....	10
第2節 土坑.....	13
第3節 遺構外出土遺物.....	17
第Ⅴ章 まとめ.....	19

挿図目次

第1図 位置図.....	1
第2図 周辺遺跡分布図.....	6
第3図 調査区設定図.....	7
第4図 土層図.....	8
第5図 全体図.....	6
第6図 1号住居址実測図.....	11
第7図 1号住居址出土土器実測図及び土器拓影図.....	12
第8図 土坑実測図.....	14
第9図 5号土坑実測図及び出土土器実測図・土器拓影図.....	15
第10図 遺構外出出土土器土器拓影図.....	16
第11図 遺構外出出土石器実測図.....	17

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表.....	5
第2表 土坑一覧表.....	15

図版目次

- 図版1 調査地近景（南東より）・調査地遠景（南東より）
- 図版2 1号住居址・5号土坑遺物出土状況
- 図版3 1号土坑・2号土坑・3号土坑
- 図版4 出土土器1・出土土器2・出土土器3
- 図版5 出土土器4・遺構外出土土器

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

町立箕輪東小学校は、明治5年開校以来、本年度で120周年を迎える。この長い歴史を誇る本校は、その敷地一帯に埋蔵される大垣外遺跡と共に更に新しい歴史を歩み続けている。

本遺跡は、沢川の押し出しで形成された長岡扇状地の沢川を挟んだ北側で、かつ段丘上にあり、その範囲はやや不明確である。平成元・4年度に行われた二度に渡る調査によって、縄文時代中期初頭を中心とする平安時代にまで及ぶ複合遺跡であることが判明した。また、体育馆及びプールの建設というごく限られた範囲の中での調査ではあったが、埋蔵されている遺構・遺物の広がりが現校舎のある東側に向かって、より密になると推測できる。



第1図 位置図

1:50,000

このような調査の経過も踏まえ、今回、老朽化した渡り廊下の全面改築に伴う約370m²に対し、町教育委員会内で遺跡の保護協議を行った。その結果、対象となる全面積について発掘調査による記録保存を行うことで合意し、調査を行う運びとなった。そして、町教育委員会が新たに調査団を結成し、平成5年5月11日から6月2日までを期間として本遺跡の第3次となる発掘調査を実施した。調査終了後、直ちに整理作業を開始し、翌6年3月をもって報告書の刊行に至った。

尚、調査地点は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪3187-1番地他、北緯35°55'48"、東経137°59'43"の地点で、標高約705mに位置する。天竜川との比高差は約40mを計る。

第2節 調査組織の編成

〔平成5年度調査組織〕

調査主体・事務局

箕輪町教育委員会 教育長 堀口 泉

社会教育課長 大槻丞 司

主幹 柴 登巳夫（箕輪町郷土博物館主任学芸員）

副主幹 青木 正（箕輪町郷土博物館事務職員）

主査 赤松 茂（箕輪町郷土博物館学芸員）

臨時職員 酒井峰子

臨時職員 根橋とし子

臨時職員 宮脇陽子

調査団

調査団長 堀口 彦雄

調査主任 赤松 茂

調査員 福沢 幸一

調査員 根橋とし子

調査員 宮脇陽子

調査団員 井上武雄、大槻泰人、岡 章、岡 正、春日義人、唐沢光國、倉田千明、

小池久人、小鶴久雄、後藤主計、笹川正秋、野村金吉、伯耆原 正、堀 五百治、

堀 美人、松田貢一、松田幸雄、水田重男、向山幸次郎、矢島祥亮、山口昭平、

山田武志、西出あゆみ、根橋由紀、百瀬千里

第3節 調査日誌

5月11・12日（火・水） 晴

調査区内に數か所トレンチを入れ、遺構・遺物の確認を行った。住居址らしい遺構が確認された。

5月24日（月） 曇

重機にて調査区全体の表土を剥いだ。

5月25日（火） 晴

上面確認を行った。縄文土器が出土した。

5月26日（水） 晴

上面確認を行った。確認面が不安定で遺構の確認に困難を要した。

5月27日（木） 晴

給食室東側のAトレンチ北側に、土層堆積状況を見るため新たなトレンチを入れた。また、1号土坑の半剖を行った。長野日報が取材に来た。

5月28日（金） 晴

Aトレンチ内に検出された1号住居址の掘り下げと壁探しを行った。また、1号土坑の断面測量及び全剖、2号土坑の半剖も行った。

5月31日（月） 晴

Aトレンチの土層断面測量と、1号住居址、2号・3号土坑の平面測量を行った。また、5号土坑内に出土した土器の測量と取り上げを行った。

6月1日（火） 晴

1号住居址の平面測量の続きと、全体写真を撮った。

6月2日（水） 曇

3号土坑の測量を行い、本日にて全ての調査を終了した。



第Ⅱ章 遺跡の立地

第1節 自然環境

箕輪町は、西に木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の東方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のはば中央を東西に二分するように南流している。その両岸は河岸段丘と数多い扇状地とが独特の地形を作り出している。

東方の山麓から流れる沢川によって形成される扇状地は川を挟んで長岡区と南小河内区に分かれる。扇状地における地質構造はローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円碟層・砂層で構成されている。天竜川はその扇端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を造り上げている。段丘の尖端部は天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい緩やかな傾斜地である。段丘下には扇頂部や扇尖部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜疊層と沖積層の境に出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利とあわせ、豊かな水源に恵まれている。

遺跡は、この扇状地の沢川を挟んだ北側尖端部に立地する。上記の通りの恵まれた水源はもとより、西へ緩やかに傾く傾斜は日当たりもよく、また東方にひかる山林は、特に縄文時代の食料源となるドングリ等の採集、獣の狩猟の場として最適だったであろう。このように恵まれた自然環境の中に大垣外遺跡は存在するといえよう。



上空より遺跡地を望む

第2節 歴史環境

天竜川左岸段丘上一帯は竜東地区と呼ばれ、ここには長岡区、南小河内区が東部の一単位として存在している。地形は天竜川沿岸水田地帯から小段丘や扇状地を経て伊那丘陵になっている。この竜東地区的遺跡の分布状況は、沢川の河岸段丘上にみられる遺跡（1、2、4、11）と、山裾に広がる遺跡（3、5～10、12）とに分けられる。大垣外遺跡は、前者の代表的な遺跡と言える。後者の遺跡の多くは、長岡区にあり、ここは昔から土地が肥沃であるため人々の生活の舞台であった。また、以前は30基前後の古墳が存在していたが、現在では10基ほどが確認できるのみである。沢川を隔てた南小河内地籍の舌状台地上に、上の平城跡（遺跡）がある。

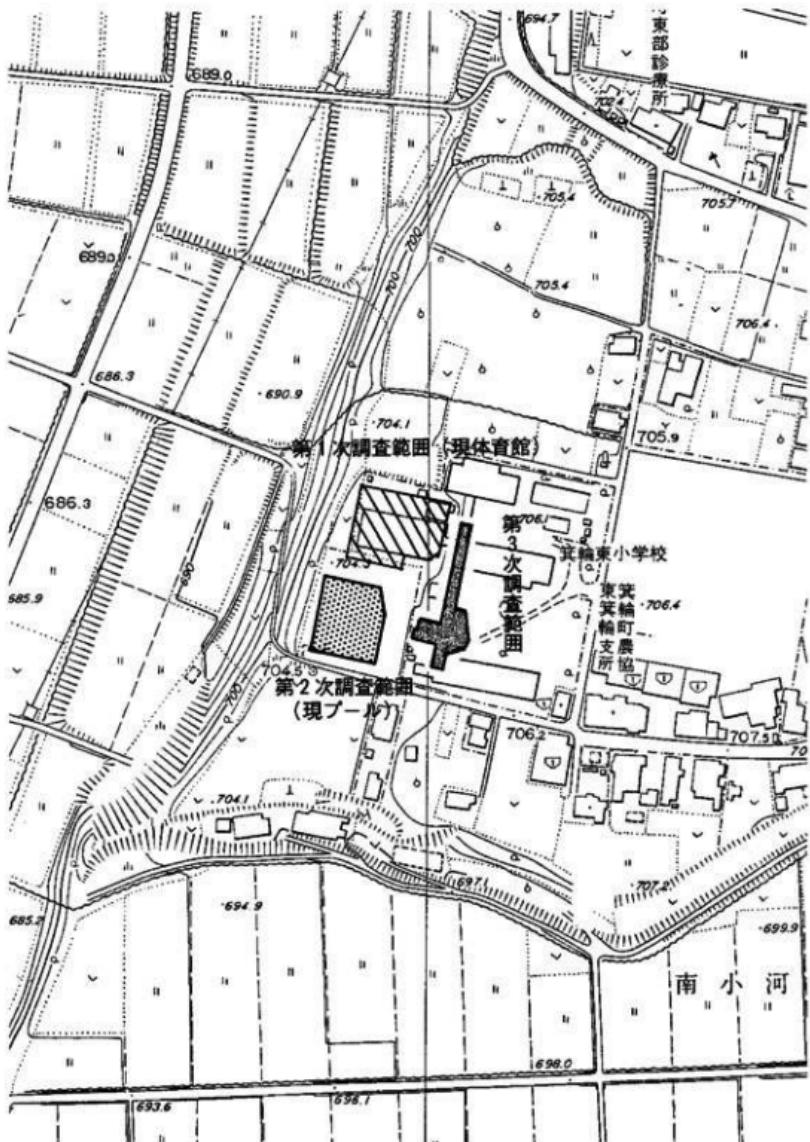
これらの遺跡を保護していく上でも、今後この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があると言える。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代						備考
				旧石	繩文	弥生	古墳	奈・平	中・近	
1	大垣外	南小河内	扇央		○	○	○	○		平成元年第一次、平成4年第二次発掘調査、今回調査
2	北田	南小河内	段丘		○			○		平成4年発掘調査
3	殿屋敷	南小河内	扇央		○					
4	普济寺	南小河内	台地		○				○	昭和63年発掘調査
5	日向前	南小河内	扇央		○					
6	上の平	南小河内	台地	○	○				○	昭和44年県史跡指定
7	一之沢	長岡	山麓		○			○		昭和62年発掘調査
8	源波古墳	長岡	扇頂				○			昭和62年発掘調査
9	源波	長岡	扇頂		○			○		昭和62年発掘調査
10	角道	長岡	扇央		○					
11	角畠古墳	長岡	扇央				○			
12	古神	長岡	扇央		○	○			○	平成2年発掘調査
13	羽場の森古墳 1～3号	長岡	段丘				○			



第2図 周辺遺跡分布図



第3図 調査区設定図

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 調査方法と結果概要

今回の調査対象地は、過去2回の発掘調査により遺構・遺物の出土の可能性が高いと考えられていた。調査以前の現地は、旧渡り廊下の基礎工事等で部分的に破壊が進んでいた。

まず調査は、基礎工事のおよぶ深さを目安に、遺構確認面の10~15cm上までの表土を大型重機にて除去し、その後手作業で直交する2本のトレンチ掘りと、遺構上面確認を行った。確認された遺構については、遺構の種別ごとに確認した順で番号を付けた。グリッドは、5m四方で主軸を南北方向に併せて設定し、南北方向は南よりアルファベットを、東西方向は西よりアラビア数字を用いて標記した。ベンチマークは、水準点より移動し調査区内に任意に設定した(704.516m)。尚、調査の記録は、平板とやり方の併用による平面測量と、写真撮影を行い、できるだけ出土した遺構・遺物の状況を克明に記録することに努めた。検出した遺構は以下のとおりである。

- ・住居址 1軒 (縄文時代)
- ・土 坑 5基 (縄文時代、近代、時期不明)

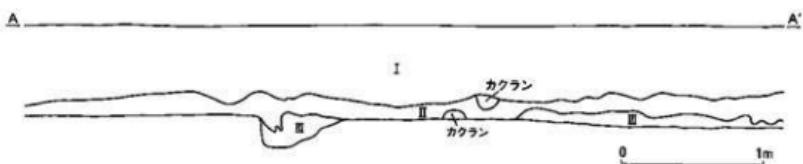
第2節 土層堆積状況

本遺跡の位置する天竜川東岸の扇状地及び段丘上における地質構造は、天竜川西岸地域とは同じ耕作土等の黒褐色腐食土層→軽石・スコリア・ラビリを混入するローム(テフラ)層→花崗岩を主とする円礫・砂層で構成されている。

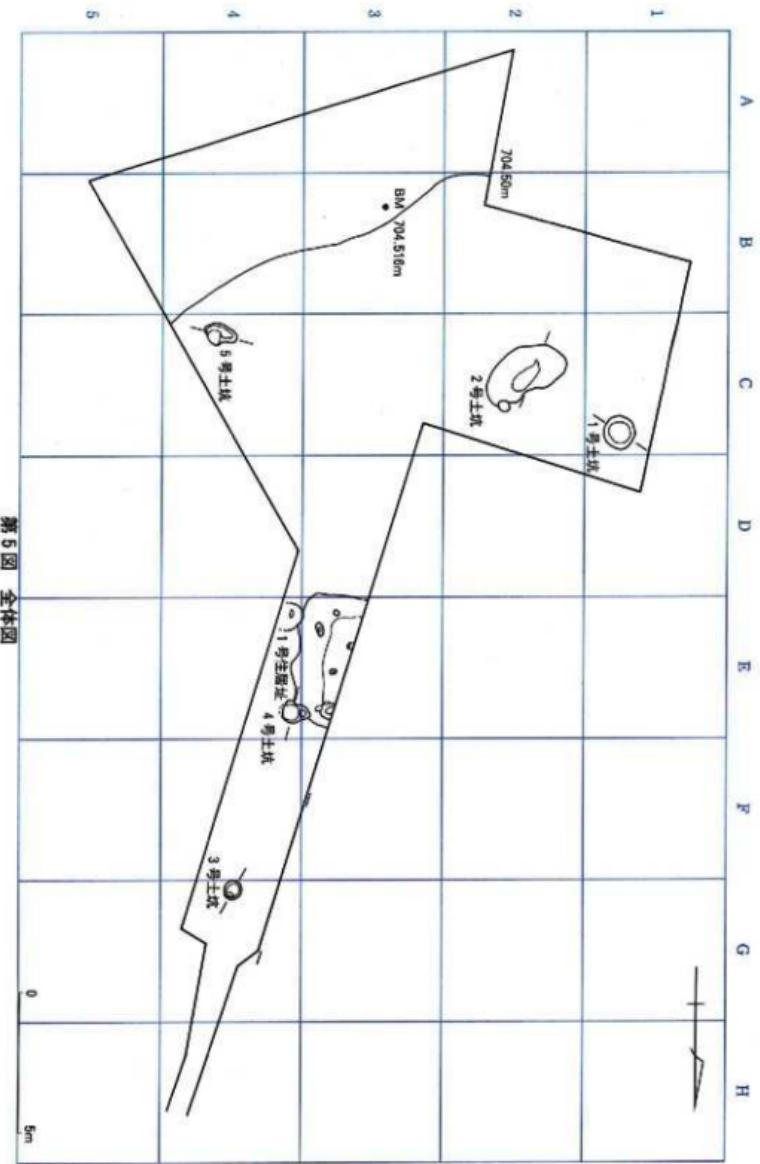
I層：カクラン・置土。ローム層がマーブル状に含まれる。締まり強、粘性中。

II層：暗褐色土層(10YR3/3)。耕土。1cm大の礫を10%含む。締まり、粘性とも中。

III層：暗黄褐色土層(10YR6/8)。シルト層。締まり、粘性とも中。



第4図 土層図



第5図 全体図

第IV章 遺構と遺物

第1節 住居址

1. 1号住居址

遺構（第6図） 調査区のほぼ中央部E-3・4グリッドに位置する。住居址西側は調査区外に埋没し、また4号土坑に切られているため正確な規模・形状は不明であるが、約3割の検出であると思われる。住居址の掘り込みは確認面から緩やかに傾斜をつけながら掘り込まれ、壁の立ち上がりは、明確に認めることはできなかった。その底面には、堅く敷き締められた床が直径3.5m範囲で平坦に広がり、確認面からの比高差は、36cmを計る。また、P5脇に長軸53cmの転石が床上13cmに存在し、加工もしくは火焼の痕跡は見られなかった。用途は不明である。

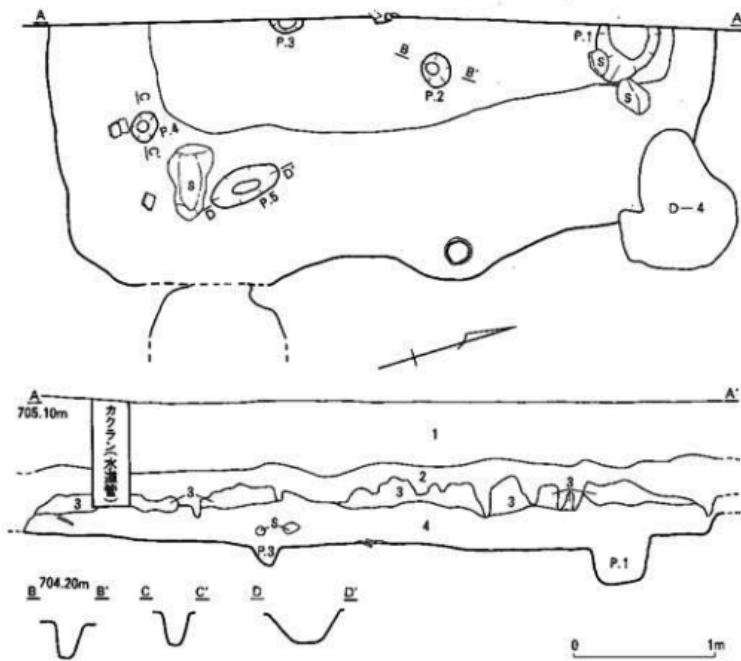
ピットは、P1 (44×(40)×36cm)・P2 (24×20×26cm)・P3 (24×(10)×14cm)・P4 (20×20×24cm)・P5 (54×26×22cm)の5穴を検出した。いずれも、柱穴と判断しにくいものだった。

覆土は2分層された。

1層：暗褐色土層 (10YR3/2・7.5YR4/6の混合)。1~3cm大の砾を5%含む。締まり、粘性ともに中。

2層：暗褐色土層 (7.5YR3/3)。炭化物5%、土器片2%を含む。締まり、粘性ともに強。

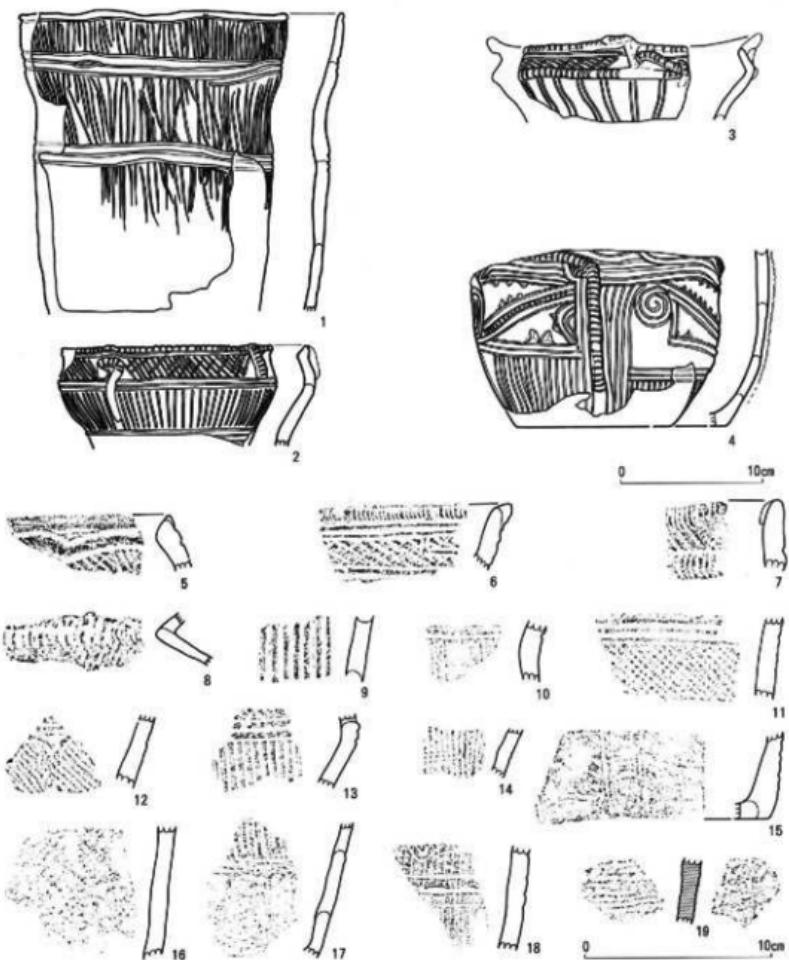
遺物（第7図） 本住居址の出土土器は、1~19で、石器の出土は認められなかった。土器は、主に覆土中より出土した。器形が判別でき、復元が可能なものはほぼ同一箇所に集中して出土していた。1は床直上より破片の状態で極小範囲にまとまって出土した。中型の深鉢で、口縁部は僅かに内湾を見せ立ち上がる。頸部はほとんど屈曲せず副部へつながる。文様は、2種類の沈線で構成されており、半截竹管状工具で、縦位に不規則な沈線を全面に施した後、口縁部・頸部・胴部の3箇所に、横位平行沈線を付けている。2・3は破片で、床直から出土している。口縁部のみで何れも中型の深鉢と思われる。キャリバー型で口縁上部は「く」の字状に外開する。また、3の口縁部には突起が施され、恐らく4単位と思われる。文様は、隆帯の貼付と格子目に近い斜沈線・半截竹管状工具による縦位沈線とで構成され、2・3とも大きな差異はない。4は、住居址の壁内から個体のまま、逆位で出土した。また、人為的に胴中位より切り離し、欠損部位の割れ口を丁寧になでて丸くした二次的な加工痕が認められた。土器の再利用といえる。底部は欠損して無い。文様は、縦位に隆帯を貼付し、また半截竹管状工具による平行沈線を、縦位・横位・斜位に施している。文様に統一性は見られない。



第6図 1号住居址実測図

5～19は何れも覆土中より出土した土器片である。半截竹管状工具による縦位・横位の平行沈線を主体とするもの（5、6、8～11、13～15、17、18）がほとんどで、沈線と縄文の圧痕が施されたもの（7、12、16）は、僅かの出土だった。また、6～8は爪形文が施されている。19は胎土中に纖維を混入し条痕文を施す流入品である。

尚、本住居址の時期は、出土土器の形式より縄文時代中期初頭に位置づけられよう。



第7図 1号住居址出土土器実測図及び土器拓影図

第2節 土坑

本調査において5基の土坑が検出された。土坑は、規模・形状・内部構造・覆土等の差異により各土坑の用途・性格が異なると思われる。

1号土坑（第8図）

C-1グリッドに位置する。近年、糞の糞で堆肥を作ることを目的とした、本地域で「土だめ」と呼ばれる施設である。直径約230cmに素掘りした後、石灰質の白土を約10cmの厚さに張り付けた槽を構築している。上部は削平されている。遺物はない。

2号土坑（第8図）

C-2グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸が600cm弱と検出土坑中最も大型のものである。掘り込みはすり鉢状で、壁面及び底面には若干の凹凸が認められる。覆土はレンズ状に、規則性のある自然堆積をしている。遺物はない。

3号土坑（第8図）

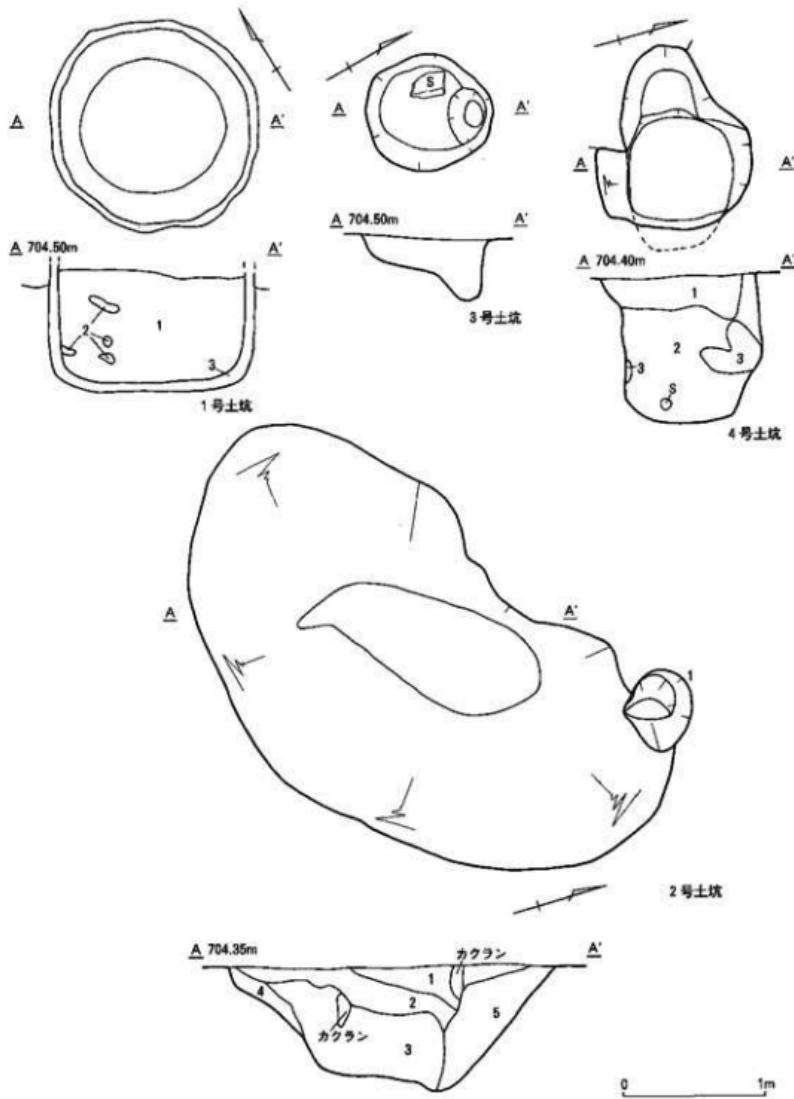
G-4グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。深さは浅く、断面は台形を呈する。北側にピット状の落ち込みがみられる。遺物はない。

4号土坑（第8図）

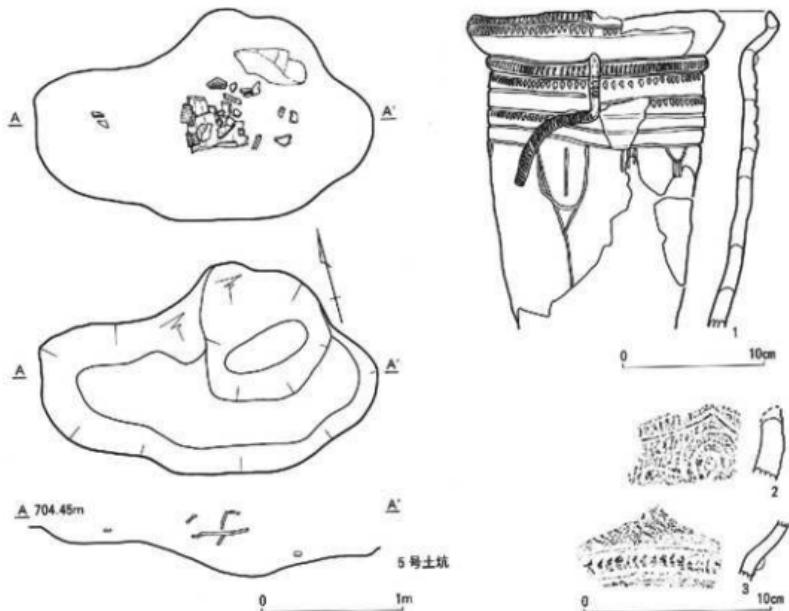
E-4グリッドに位置する。平面形はあまり整わない梢円形を呈する。掘り込みはほぼ円筒形で、一部袋状にえぐられた箇所もある。1号住居址を切って構築されている。覆土の堆積もやや規則性に欠けるものの、おおよそレンズ状の自然堆積をしている。遺物はない。

5号土坑（第9図、第9図1～3）

C-4グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈する。掘り込みはすり鉢状で、深さは浅い。本造構の直上ないし内部に、土器片が重なるようにまとまって出土した。恐らく土圧によって押しつぶされたとの見方ができよう。1は、中型の深鉢で、頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部はキャリバー状に立ち上がる。頸部及び胴部に施される陸帯部の文様は、半截竹管状工具による爪形文で、口縁部には対称に2ヶの突起が施される。また、口縁部から胴上部にかけて横位に連続する刺突文が、また胴部には棒状工具による並行する横位沈線文と、3パターンからなる懸垂文が、それぞれに施される。底部は欠損している。2は、内湾ぎみに立ち上がる波状口縁部の一部で、恐らく1と同様の器形を呈するものと思われる。文様は、半截竹管状工具による平行沈線と、横位に連続する刺突文で構成されている。3は、胴部から屈曲せずまっすぐ外開して立ち上がるタイプの頸部の一部である。頸部にある陸帯部には、半截竹管状工具による爪形文が施され、また平行する沈線文も付けられる。陸帯より上部は全面的にL R繩文が施される。出土土器は、繩文時代中期初頭五領ヶ台式に比定されよう。



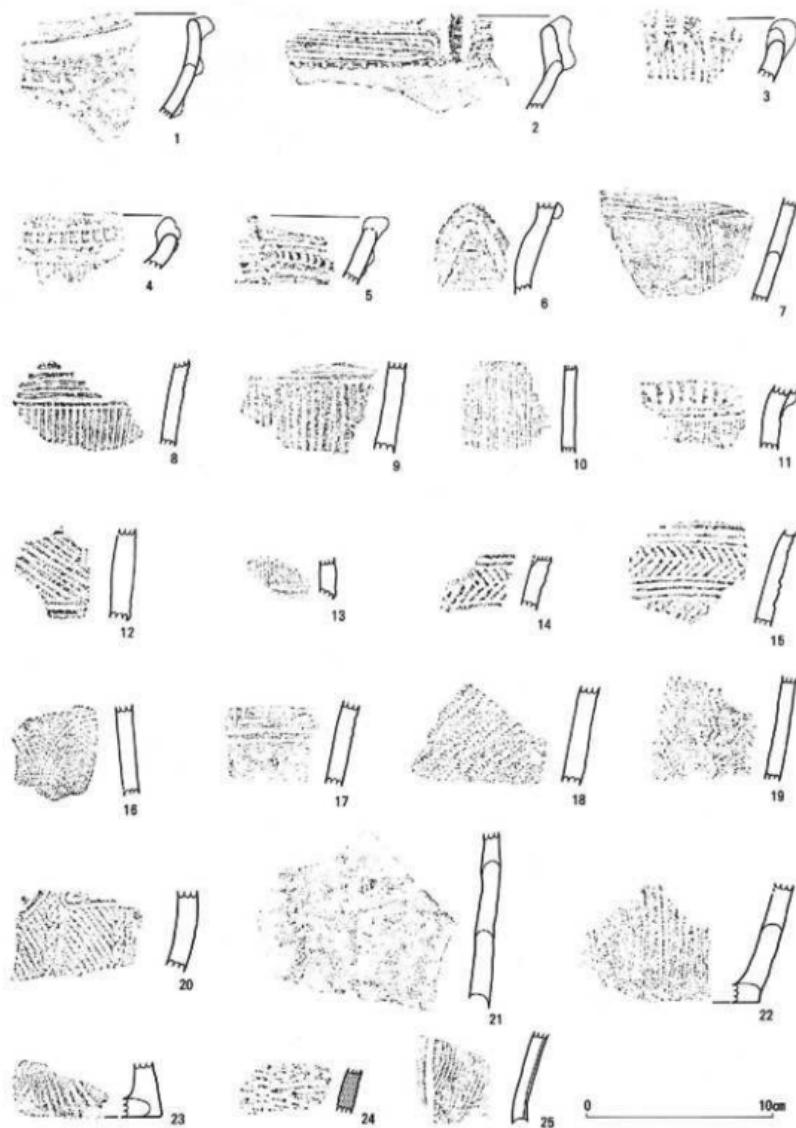
第8図 土坑実測図



第9図 5号土坑実測図及び出土土器実測図・土器拓影図

第2表 土坑一覧表

番号	平面図	断面形	規 模	覆 土	埋り粘性	備 考
D-1	円 形	U字形	225 × 221 × 130 [m]	1層：黒褐色土層(10YR2/3)。シルト混。 2層：黄色土層(5Y7/8)。花崗岩の風化砂砾。 3層：灰オリーブ色土層(7.5Y5/3)。石灰質土。	弱 強 弱	近年「土だめ」として使用。
D-2	椭 円 形	台形	600 × 284 × 134	1層：褐色土層(7.5YR4/6)。 2層：暗褐色土層(7.5YR3/4)。 3層：麻痺褐色土層(7.5YR2/3)。ローム粒子を5%含む。 4層：明褐色土層(7.5YR5/8)。ローム粒子を30%含む。 5層：豊色土層(7.5YR6/8)。ローム粒子を30%含む。	強 中 中 強 中 中	
D-3	円 形	不整 台形	195 × 163 × 157	1層：明褐色土層(7.5YR5/6)。炭化物を10%含む。	中	
D-4	不 整 椭 円 形	U字形	137 × 122 × 65	1層：明赤褐色土層(5YR5/8)。炭化物を1%含む。 2層：明褐色土層(7.5YR5/8)。 3層：暗赤褐色土層(5YR3/3)。ローム粒子を3%含む。	強 弱 中	I号住居址を切っている。
D-5	椭 円 形	台形	239 × 150 × 45			出土遺物 (第9図1~3)



第10図 遺構外出土土器土器拓影図

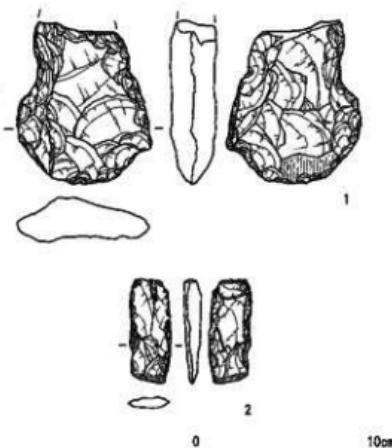
第3節 遺構外出土遺物

1. 土器 (第10図)

遺構上面確認調査において出土した土器片の主に縄文時代中期初頭に属するものを図化した。文様の施文の特徴からみて、半裁竹管状工具による沈線文構成のもの、(1~13、16、17、22)縄文を施すもの(18、19、21、23)、両者の組み合わせによるもの(14、15、20)の3タイプに分けることができる。初めのタイプは継位・横位・斜位・格子目状に沈線を施すものが主である。1~5は口縁部で、陸帯の貼付が見られ、爪形文・印刻が付けられている。2番目のタイプの縄文は2パターンに分かれる。R L縄文(18)と、無文部を有する結節L R縄文(19、23)を施すものである。21は後者に属するが、結節部は単節縄文であるのに対し条は無節である。3番目のタイプは、地文をそれぞれR L縄文(15)、結節L R縄文(20)とし、半裁竹管状工具による横位・斜位の平行沈線を施すものである。尚、14には縄文部分が欠損しているが、15と同一のものと考え3番目のタイプに入れた。24は、纖維の混入する条痕文土器で、25は、棒状工具による継位沈線とR L縄文が施される。24は縄文時代草期、25は縄文時代中期後半に位置付けられる。

2. 石器 (第11図)

調査区内から2点の石器が出土している。1は長さ(8.8cm)、幅7.0cmの中型の打製石斧で上部は欠損している。中央部に抉りが認められ分銅型に属する。また、側面下部に使用痕と思われる磨痕が認められる。石質は、砂岩。2は長さ5.5cm、幅2.2cmの小型の磨製石斧で、長方形を呈している。敲打による成形後、基部のみ研磨による両面調整で、鋭利な刃部を作出している。石質は頁岩。



第11図 遺構外出土石器実測図

第V章　まとめ

大垣外遺跡における発掘調査は、平成元年度に町立箕輪東小学校体育館改築工事に先立って行われており、縄文時代中期初頭及び晩期末の各遺構・遺物が出土し、また平成3・4年度には同校プール新築工事に伴って第2次調査を実施し、第1次調査と同様に縄文時代中期初頭の住居址を検出し、大きな成果を得ている。今回の結果及びその内容については、前各章にて図化・記述のとおりであり、本章では若干の補足を加え、まとめとしたい。

検出した遺構は、限られた小面積での調査にも関わらず、住居址1軒、土坑5基であり、各遺構より出土した土器の特徴から縄文時代中期初頭に属し、過去の出土例と比較しても一連性のある結果が得られた。土器の特徴として、半截竹管状工具による沈線文・爪形隆帯文と、結節縄文との組み合わせにより幾何学的な文様構成を行うもので、「梨久保式」または「五領ヶ台式」に比定されよう。特に沈線文は、「Y」字状の連続する半円弧文を施すものが数多くみられ、縄文も結節区画による斜縄文が主であり、羽状縄文はみられない。更に、本町長岡の古神遺跡で出土したいわゆる「踊場式」と称される並行沈線文を主体とする文様構成を行うものも上記の一群に加わっている。また、これらの土器群の他に、幅広の爪形文をモチーフとする器薄で焼成のよい、他よりも比較的硬質の土器片が住居址から出土している。特に胎土が他のものとまったく異質な点が大きな特徴と言え、本地域所産のものとは考えにくいタイプであり、第2次調査においても住居址からその検出例がみられてる。中国・四国・近畿地方を中心として分布し、縄文時代中期全般に存続する「船元・里木式」土器が中部地方の小数の遺跡から出土した類例が認められているが、本遺跡出土土器群にわずかながらもその諸特徴に類似性を感じられる。それらを、他地域からの影響もしくは搬入品として扱うことは、周辺地域での類例も少なく、はっきりとしたことは結論づけられないが、他文化圏との交流を示唆する一例として捕らえておき、今後の研究に大きな期待をしたい。

尚、本遺跡は学校の敷地を中心として広がる遺跡であり、過去の調査結果も踏まえ、今後予想される同校各施設の改築計画及び周辺地域での開発計画に、この保護・保存に注意を払う必要がある。

末筆ではありますが、調査の進行に深いご理解とご協力をいただきました南小河内区並びに学校関係者、発掘調査関係の方々に厚くお礼申し上げます。

参考・引用文献（著者名50音順）

- 今村 啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」東京大学文学部考古学研究室紀要第4号
- 江坂 煉彌 1949 「相模五領ヶ台貝塚調査報告」考古学集刊第3冊
- 岡谷市教育委員会 1986 「梨久保遺跡」
- 長野県教育委員会 1974 「堂地・中道遺跡」県中央道埋文調査報告書
- 長野県史刊行会 1891 長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表
- 長野県史刊行会 1983 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 中・南信版
- 長野県史刊行会 1988 長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1987 「第4節 大洞遺跡」中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書
- 能登 健 1981 「五領ヶ台土器」 繩文土器大成2
- 三上 徹也 1987 「梨久保式土器 再考」長野県埋蔵文化財センター紀要1
- 箕輪町教育委員会 1988 「源波古墳」
- 箕輪町教育委員会 1988 「一之沢遺跡」
- 箕輪町教育委員会 1989 「普濟寺遺跡」
- 箕輪町教育委員会 1990 「大垣外遺跡」
- 箕輪町教育委員会 1991 「古神遺跡」
- 箕輪町教育委員会 1993 「大垣外遺跡-第2次-」
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1976 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1986 箕輪町誌 第2巻 歴史編
- 山口 明 1978 「繩文時代中期初頭土器群の分類と編年」蒙台史学第43号
- 山本 典幸 1988 「五領ヶ台式土器様式」 繩文土器大観第3冊 中期

図 版

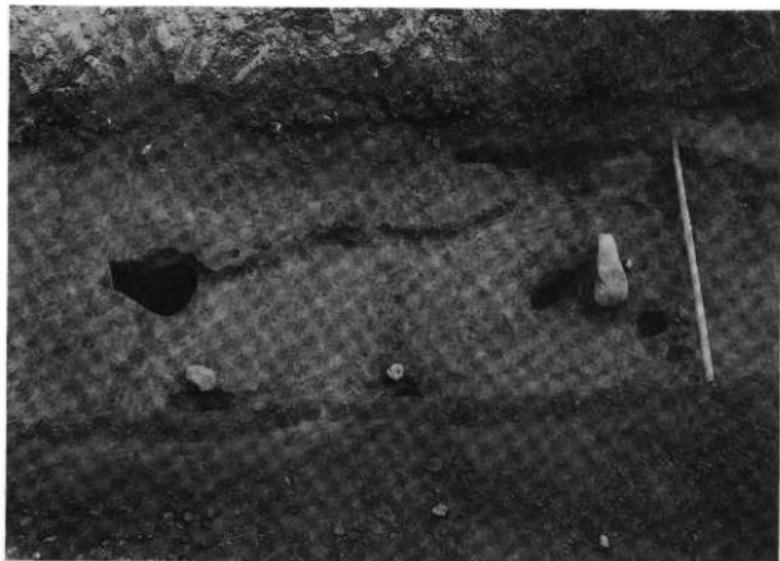


遺跡地近景（南東より）

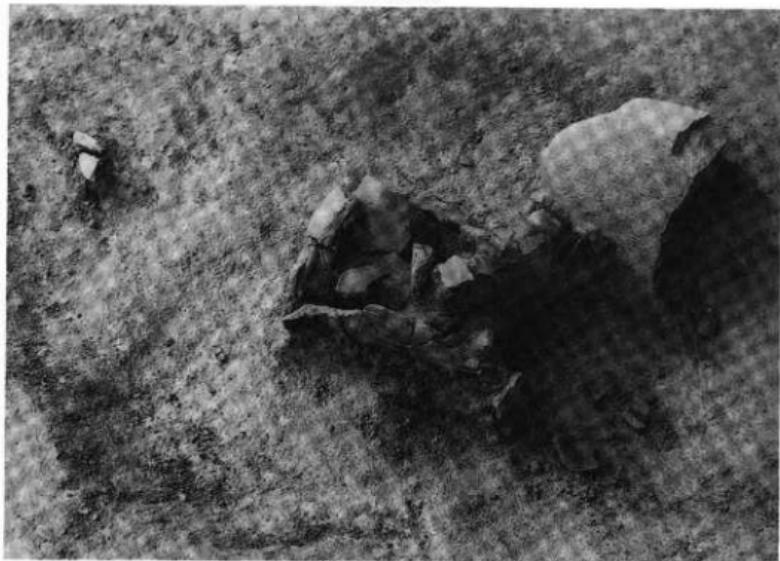


調査地遠景（南東より）

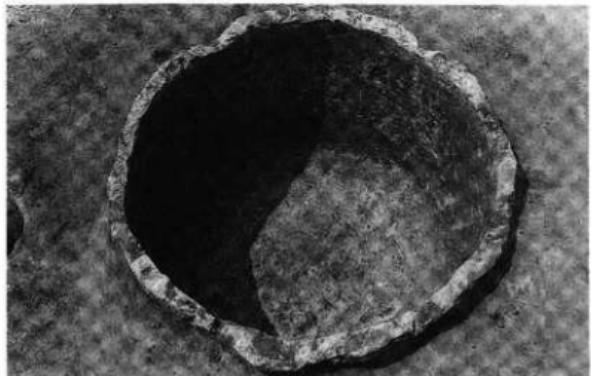
圖版
2



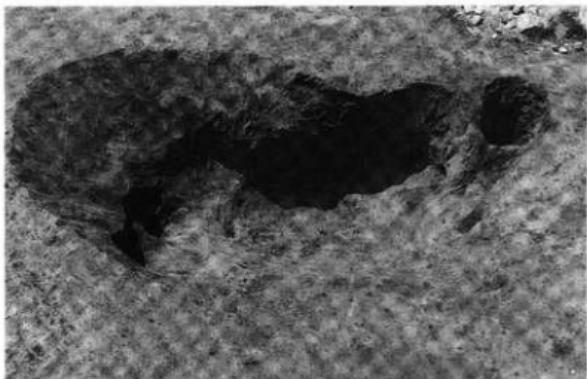
1号住居址



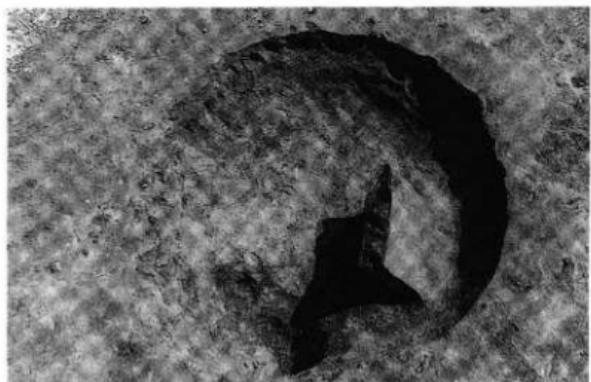
5号土坑遺物出土状况



1号土坑



2号土坑



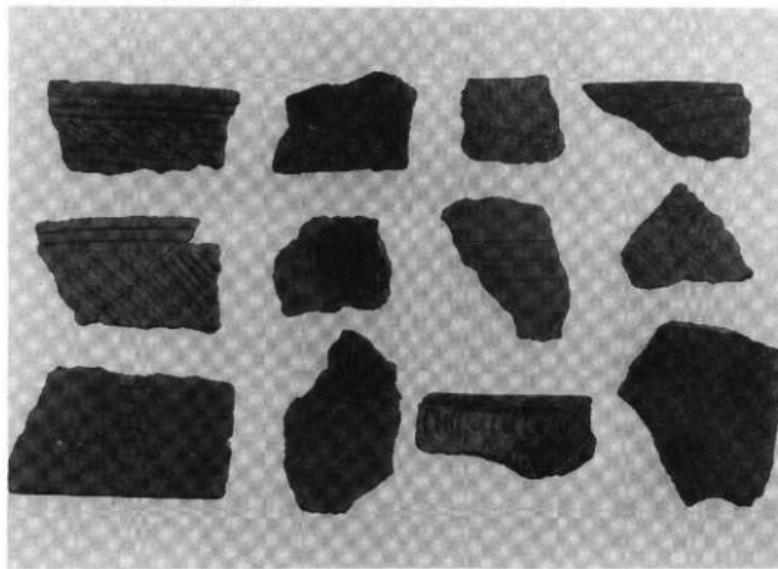
3号土坑



出土土器 1 (1号住居址)



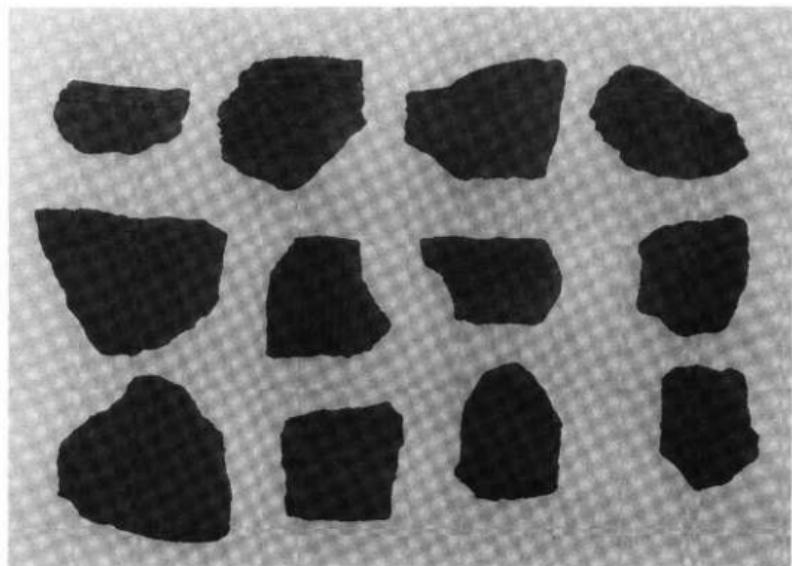
出土土器 2 (1号住居址)



出土土器 3 (1号住居址)



出土土器 4 (5号土坑)



遺構外出土土器

大垣外遺跡

箕輪町立箕輪東小学校渡り廊下改築工事に伴う
大垣外遺跡の第3次緊急発掘調査報告書

平成6年3月30日 印刷

平成6年3月30日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 (株) 富士印刷